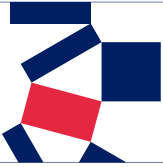


公認プログラム



発行：平成 31 (2019) 年 1 月

編集：武蔵野市総合政策部企画調整課

オリンピック・パラリンピック担当

武蔵野市緑町 2-2-28 TEL : 0422-60-1970

むさしのジュニア 2020 通信

Vol. 1

武蔵野市では、東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会等に向けた武蔵野市実行委員会を立ち上げ、「むさしのジュニア特派員」という取り組みを開始しました。

1 年目となる今年度は、市内から 12 人の小・中・高校生が集まりました。市内のスポーツイベントを中心に取材を行い、そこで感じたことを素直な言葉で記事にして伝えます。

ジュニア特派員たちの目から見た東京 2020 大会への動きを、ぜひ感じてみてください。

**東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会は来年、
そしてラグビーワールドカップ2019日本開催は、いよいよ今年です。**



**私たちジュニア特派員が、
皆様に楽しいニュースをお届けします！**

創刊のあいさつ

ジュニア特派員 編集長
新聞隆博

こんにちは。武蔵野ジュニア特派員の新聞隆博です。私達は 2020 年に行われる東京 2020 オリンピック・パラリンピックを中心としたスポーツについて子供でも分かりやすく、読みやすいことが特徴の新聞を制作しています。そのため、スポーツイベントへの取材や写真撮影など、様々な活動を行っています。7 月から始まったこのプロジェクトは、メンバーが小学生から高校生までの子供で、まだまだ特派員としての経験が浅い私達ですが、一生懸命活動中です。この活動を通して、私達もまだまだ知らないスポーツの魅力や奥深さを感じ、それを紙面を通じて人に伝えることの難しさを学びました。東京 2020 オリンピック・パラリンピックという世界でも大きなスポーツイベントを、私達の新聞で、盛り上げていけたら嬉しいです。



わたしたち しんぶん も あ

Sports for All パラ・フェスタ



じっすん
(実寸 A4 チラシ)

がつ にち ど むさしのそうごうたいいくかん
9月1日(土) 武蔵野総合体育館

【ゲスト】 たなかり え もとたいそうにほんだいいゆう たかはしか ずきせんしゆ ひろせたかゆきせんしゆ よしだしんいちせんしゆ
田中理恵さん(元体操日本代表)、高橋和樹選手(ボッチャ)、廣瀬隆喜選手(ボッチャ)、吉田信一選手(パ
ラ卓球)、田中章仁選手(ブラインドサッカー)、青木洋子選手(視覚障がい者マラソン)

とくはいん はつしごと
ジュニア特派員の初仕事となったパラ・フェスタ。初めての取材は緊張で少しごちなさもありましたが、イ
ンタビューでは追加の質問もとび出し、生き生きと取材をしてくれました。それぞれの記事では取材に参加し
たジュニア特派員たちが、参加・体験・感じたことを自分の言葉で書いています。



ボッチャで
使用する
ボール



ボッチャ体験をするジュニア特派員

またやってみたくなる ボッチャ体験

わたし 私は、パラ・フェスタでボッチャ体験をしました。体験では、
せんしゆ 選手たちがプレーしているのを見せてもらいながら、やり方を
おし 教えてもらいました。

ボッチャは、赤と青のボールを、的になる白いボールに近づ
ける競技です。近づけることを「アプローチ」、敵の球に当て
て遠ざけることを「ヒット」といいます。私たちも体験させて
もらいました。最初はむずかしそうでしたが、やってみるとボー
ルを的に近づけるのが楽しかったです。そして、私がすごいと
おも 思ったのは、ボールの上にボールをのせる大技です。成功した
ときは、すごい! やってみたい! と思いました。私は、ボッチャ
を体験して、とても楽しかったです。またやってみたい、と思
いました。

しゆざい ぶん みちかわゆづき
(取材・文) 道川結月

パラ・フェスタで最先端の義足を体験

パラ・フェスタでは、パラリンピックの陸上競技で使用される特殊な
ぎそく 義足の体験コーナーもありました。義足はカーボンできていて、一枚
いた お 折りまげてつくられています。とても軽く、バネのようにしなやか
じめん せつ ぶぶん
で、地面と接する部分には、スパイクのようなピンがついているものも
ありました。

たいけんよう ぎそく じっさい ため
体験用の義足で実際に試してみた所、使い方にもコツがあることがわ
かりました。うまく走るポイントは、前にはねるように走る事で、逆に
ふつう ある ことにはむいていないようです。まさに、はし ことに とうか
普通に歩くことには向いていないようです。まさに、はし ことに とうか
した、アスリートの足元を支える、先端技術の結晶であることがよくわか
りました。

しゆざい ぶん さくらい ゆう
(取材・文) 桜井裕雨

たいけんよう ぎそく
体験用の義足



見えない私を仲間が救う ブラインドサッカー体験



ブラインドサッカーを体験！
仲間の声をたよりにボールをけて… ゴール！

ブラインドサッカーのボールの中



パラ・フェスタでブラインドサッカーの取材をしました。ブラインドサッカーとは、目が見えない人がやるサッカーです。目が見えないので周りの人の声やボールの音を聞いて試合をやっています。

ボールのしくみは、ボールの中にいくつかのふくろ（パネル）がついていて、その中に小さな鉄の玉が入っています。ボールが動くとシャラシャラ音がなります。なので、お客さんは静かにしていなければなりません。

実際にアイマスクをつけてやってみました。そうしたら、まわりの人の声やボールの音が大事だということがよく分かりました。ブラインドサッカーが大変だということがよく分かりました。

(取材・文) 宮崎悠里

“自信をつけるために、自分をほめる” 田中理恵さんインタビュー

パラ・フェスタで、元体操女子日本代表の田中理恵さんに現役時代のお話を聞きました。



田中理恵さん

Q. 体操をはじめたきっかけは？

A. 体操一家でお兄さんの体操を見てやりたいと思った。

Q. 体操をやっていてよかったと思ったことは？

A. 新しいわざが成功した時のよこび、がんばってよかった。

Q. 本番前にすることは、どんなことですか？

A. 自信をつけるために、自分をほめる。たくさん練習して、自分を追い込む。

田中理恵さんのお話を聞いて、私が一番心にのこった事は本番前にすることです。学校や習い事でも、活用できると思いました。また、練習することの大切さも、あらためて考えることができました。

(取材・文) 橋口若奈



生の声が残ったトークイベント

午後も近くなったところで、トークイベントが始まりました。田中理恵さん、高橋和樹選手、吉田信一選手、青木洋子選手、田中章仁選手、エルサルバドルから来日した選手3名を交えてトークをしました。田中理恵さんはオリンピックの思い出について聞かれると「兄弟と一緒にオリンピックの舞台に立てたことが、緊張したがうれしかった」と答えました。

また高橋選手は、「東京パラリンピックに向けて、最高の姿を見せるため、力をつける」と答えました。「ブラインドサッカーはマイナーなスポーツだが、体験してもらうことで興味をもってもらいたい」と田中章仁選手。

最後に、エルサルバドルから来日した選手三人は、「全員、また東京に帰ってきたい」と言っていました。

(取材・文) 井本晋明



エルサルバドルの選手3名



田中さん(左)と高橋選手(右)

東京2020に向かって一直線!

高橋和樹選手(ボッチャ日本代表)インタビュー

ボッチャという、パラリンピックで行われている競技があります。今回、ボッチャの選手(日本代表)として2016リオ・デ・ジャネイロパラリンピックに出場した高橋和樹選手にインタビューに答えてもらいました。

Q. ボッチャの楽しいところはどんなところですか?

A. かなり頭を使う事、1手2手先を考える事。むずかしい事です。

Q. ボッチャをはじめたきっかけは何ですか?

どれくらい長くボッチャをしていますか?

A. 5年前の2013年にパラリンピックが東京で行われることを知って、せっかく日本だから、なんらかの形でかかわりたくて、選手でかかわりたいと思って始めました。

(取材・文) 高根澤真輝



高橋和樹選手

ボッチャの練習試合も見学しました!



レベッカ選手(右から3番目)とジュニア特派員



廣瀬隆喜選手(左)とレベッカ選手(右)のエキシビジョンマッチ

レベッカ選手インタビュー

私はボッチャをやっているレベッカ選手に会い、お話を伺ってきました。レベッカ選手の住んでいるエルサルバドルはどんな国か聞いてみると、障がいはまだあまり知られていなくて、バスなどが乗りにくいそうです。

ボッチャを知ったきっかけは、バスケットボールの先生のすすめだそうです。ボッチャ歴は1年10カ月で、ボッチャを始めてから選択肢が増えたそうです。車いすを使っていて不便なのはバスに乗ることで、運転手の方が手伝ってくれるそうです。

レベッカ選手の伝えたいことは、エルサルバドルではボッチャが知られていないので、もっとみんなに知ってもらいたいそうです。

皆さんもボッチャをしてみたいはいかがでしょうか。

(取材・文) 高坂こころ

ボッチャ武蔵野カップ初開催!

パラ・フェスタで行われた、ボッチャ武蔵野カップには、子供からお年寄りまで大勢の人が集まりました。屋内で楽しく安全に楽しむことができ、敵味方関係なく、華麗なプレーには拍手をし、観客も興奮しました。

また、この大会中に行われたデモンストレーションでは、日本代表選手とエルサルバドルの選手が試合を行い、誰もが試合に釘付けになりました。

今大会の優勝チームはエルサルバドルチームで、試合後のインタビューで

は、「楽しんでプレーできたことで優勝できた」とお話しいただきました。ボッチャは大人から子供まで、誰もが片手ひとつでできるスポーツで、障がい者の方とフェアで対戦できることも一つの魅力だと感じました。

(取材・文) 新聞隆博



ジャックボール (的球)



審判で使用する定規

ボッチャのルールと歴史

ボッチャのルールと歴史についてご紹介します。ボッチャは、白い的球にどれだけ近く投げられるかを競うスポーツです。

ルールは、先攻チームが適当な場所に白い的球を投げ、両チームが赤か青の球を6球ずつ投げます。投げ終わった後、的球に近いチームに点が入り、これを繰り返し、決着をつけます。

ボッチャは、障がい者スポーツの中でも様々な障がいの方に対応していて、障がい度別にクラスが分かれています。クラスによっては、ランプというすべり台のようなものを使って投げることもあります。

ボッチャの起源は、古代ギリシャの球投げともいわれています。ヨーロッパを中心に広まり、20世紀になって障がい者スポーツとして成り立ちました。

私は、ボッチャが紀元前から成り立っていたことに大変驚きました。そして、この深い歴史があるからこそ、現在たくさんの人々が熱くなるスポーツになったのだと感じました。

(取材・文) 宮川千鶴

Sports for All カヌー



じっすん
(実寸 A4 チラシ)

がつ 9月17日 (月・祝) 武蔵野プール

晴天のもと、自由参加の「ちょこっとカヌー」と事前申込の「カヌー教室」を取材。「ちょこっとカヌー」の体験では、バランスをとるのが難しい競技用カヌーにも挑戦しました。カヌー教室の取材では、教室参加者の上達に驚きながら、プールサイドで写真をたくさんとり、当日の様子が伝わる記事を書いています。

乗ってびっくり!ちょこっとカヌー体験

幼児プールでは小さな子供も参加できる「ちょこっとカヌー」のプログラムが行われ、カヌーの基礎について知ることができました。カヌーには流れのある川を下る「スラローム」と平らな水面で速さを競う「スプリント」の2種類の競技があります。カヌー自体にも違いがあり、スラローム用は3m、スプリント用は倍の6m位の長さがありました。

実際に乗ってみた所、バランスをとるだけでも難しいのに、体をねじるようにして左右のパドルをこぐ必要があります。かなりハードなスポーツであることが分かりました。プロの選手は時速20Kmぐらいを出すとので、改めてアスリートのすごさを実感しました。

(取材・文) 桜井裕雨



カヌー体験をする
ジュニア特派員

カヌー教室でやるのはこんなこと



毎年人気のカヌー教室では、こんなことをやっていました。

- ① 乗り方：体の左に重しをのせて右から乗る練習
- ② パドルのこぎ方：パドルは、たてになるようにこぐところを水にいれる。持ち方はパドルのぼこつとなっているほうが右、前から見たとき四角形になるように持つ。
- ③ カヌーからの落ち方：カヌーの真ん中からわざと落ち、カヌーを起こして、真後ろからよじ上げる。
- ④ カヌーでリレー：チームで勝負。みんな楽しそう！最後に選手によるデモンストレーションがあり、プールのはしまでまっすぐ12秒で行きました。すごく迫力がありました！

(取材・文) 石垣 龍

短時間でこんなに上達!カヌー教室

今回取材したのは、小学校低学年のカヌー教室です。教室に参加をした人は全員ライフジャケットを着て、漕ぎ方を教えてもらってから、カヌー体験が始まりました。最初の方は、方向が定まらず、カヌーとカヌーで衝突がおこったりしていました。しかし、少し練習すると、カヌーの上に立つ子がでてきたではありませんか。それを見たら、さすがに驚きました。ちなみに、大人は誰もカヌーの上に立たた人はいなかったそうです。それから何分か経つと、今度はカヌーの上に立った子がパドルでこいでいます。短時間でこんなに上達するとは思いませんでした。

(取材・文) 井本晋明



参加者がボートの上で直立!
ジュニア特派員もおどろいていました。

カヌー教室の本田教授と選手にインタビュー

私は東京女子体育大学の本田宗洋教授とその大学の生徒の方に来てお話を伺ってきました。本田教授のカヌー歴は45年以上で、毎日休まず多摩川で練習しているそうです。どのような練習をしているかという、スプリントや長距離の練習をしているそうです。

次は大学の生徒の方にお話を伺いました。毎日の練習量は、多い時で5時間以上もやっているそうで、部活で3時間、朝も練習しているそうです。どこを鍛えているのか伺うと、全身を鍛えているそうで、陸上でのトレーニングもやっているということです。最後にカヌーの面白いところを伺うと、やっただけ成果が出るのが楽しいとおっしゃっていました。皆さんもカヌーをやってみてはいかがでしょうか。



本田宗洋 教授

(取材・文) 高坂こころ

「東京2020オリンピック・パラリンピック、ラグビーワールドカップ2019に関すること」の中から、それぞれが興味のあるテーマについて、自分で調べてコラムを書きました。自分で描いたイラストや感想もあり、力作ぞろいです。紙面のところどころに掲載しているので、ページをめくってさがしてみてください。

コラム1

ジュニア特派員 宮崎悠里

タッパーってしてる？



パラリンピックの競泳には、障がいに合わせて様々なルールや用具があります。視覚障がいのクラスの競技には、タッパーがいます。タッパーは、ゴールやターンの直前に、選手の頭や背中を棒でタッチして、目が見えない選手に場所を知らせる大切な役割をしています。

これは選手の安全のためのルールでもあります。タッパーが空振りをしたとき、その時点で失格になります。タイムを落とさないようにタッチするタイミングや強さが重要で、選手とタッパーは日々息が合うように練習しています。

また、タッパーが使う棒のことをタッピング棒といいます。国によって長さや形は違い、日本では釣り竿にしゃもじ型のものをつけています。

わたしは水泳の経験がありますが、初めて知ることがたくさんありました。

日本の
タッピング棒



コラム2

ジュニア特派員 高坂こころ

オリンピック・パラリンピックについて



オリンピックは、4年に一度開催される世界的なスポーツの祭典で、人間育成と世界平和を目的とし、夏季と冬季に大会を行っています。オリンピックの歴史は今から約2800年前にさかのぼり、古代ギリシャのオリンピア地方で行われていた神々があがめる体育や芸術の祭典競技が元だといわれています。その後数々の戦乱に巻き込まれ、古代オリンピックは393年に幕を閉じました。そして古代オリンピックから1500年後、フランスの教育者ピエール・ド・クーベルタン男爵の働きかけにより、オリンピックは復活しました。大会のシンボルマークも彼が考案したものがもとになっています。パラリンピックは1952年に国際大会となりました。

そして古代オリンピックから1500年後、フランスの教育者ピエール・ド・クーベルタン男爵の働きかけにより、オリンピックは復活しました。大会のシンボルマークも彼が考案したものがもとになっています。パラリンピックは1952年に国際大会となりました。

Sports for All 水球



じっすん
(実寸 A4 チラシ)

10月8日(月・祝) 武蔵野温水プール

ゲスト 志水祐介選手、志賀光明選手、吉田拓馬選手、有馬優美選手、青木美友選手、曲山紫乃選手

ポセイドンジャパン(水球日本代表)の選手が大勢来場した Sports for All 水球。デモンストレーションでは、鍛え上げられた体から繰り出されるバックシュートに、驚きの声をあげていました。インタビューでは憧れの選手と直接話すことができ、楽しく充実した取材になったようです。

かっこいいシュートがあった デモンストレーション

ゲストトーク!! 話題の中で一番よく出たものを一つ紹介します。

「睡眠をいっぱいとり！」

をみなさん心がけましょう。

次にデモンストレーション。

発見!!

水球のぼうしには番号が書いてある(横)

デモンストレーションで一番かっこいいシュートを紹介します!

シュートを決めたのは、志水祐介選手です。ゴールに背中を向けたままの豪快なバックシュートでした!

あっという間にゴールがきまって、おどろきました!

(取材・文) 石垣 龍



とうじつ
当日のゲスト



デモンストレーションの様子
ぼうしの横に番号が書いてあります。

学年別のチームでにぎやかだったアクアゲーム

ぼくは、アクアゲームについて取材をしました。

アクアゲームは1・2年、3・4年、5・6年生と分かれて行われていました。

まず、1・2年生を見てみると、まだ腕の筋肉がついていないから思うように投げられないので、選手たちが手伝っていました。3・4年生になると速い球も投げていて、遠くから投げる子もいました。5・6年生は投げる球も速いので、選手たちも張り合っていました。

でもみんな立ち泳ぎになれていませんでした。いろいろ見ていた中でも志水選手の教え方が面白かったです。

(取材・文) 高津佑介



あこがれの選手と話ができた！ ポセイドンジャパンインタビュー

男子選手

ぼくは、あこがれのポセイドンジャパンの3選手にインタビューをしました。水球をやっているの楽しいことは、ゴールを決めることだと吉田選手が答えてくれました。水球を始めたのは、志水選手は中2、あとの2人は小3からだそうですが、苦労したことは特に3人ともなかったそうです。休日の過ごし方で少しびっくりしたのは志水選手で、スイーツ巡りをするそうです。水球の試合を楽しく見るポイントは、外国の体の大きい人や重い人に日本代表選手がどう立ち向かうかを注目して見てほしいと志賀選手が言っていました。

水球は見るのもやるのも楽しいスポーツだと思います。水球をやったことがない人でも楽しめる競技だと言うことを広く知ってもらいたいです。

(取材・文) 宮川竜登



あこがれの選手と記念撮影。インタビューにもにこやかに答えていただきました。



女子選手

有馬優美選手、青木美友選手、曲山紫乃選手にそれぞれインタビューをしました。家族や先生がきっかけで水球を始めた3人は、ご飯をたくさん食べることと、睡眠が大事だと教えてくれました。

水球の魅力について、有馬選手は「チームスポーツが楽しく、速さや強さに注目を！」、ゴールキーパーの青木選手は「元々球技が好きで、自分がシュートを止めるところに注目を！」、曲山選手は「ゴールを決めるところが楽しく、水中の高さや身体の動きに注目して欲しい！」とお話いただきました。

自分の持ち味は？という質問に対し、有馬選手はシュート、青木選手は司令塔、曲山選手は泳ぎと答えてくださりました。また、皆さん身体が大きく、日々のトレーニングや身体作りを感じました。

(取材・文) 新聞隆博

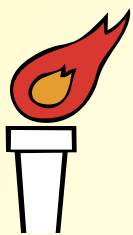


閉会式であいさつをする志賀光明選手



ゲストの吉田拓馬選手(左)と、志水祐介選手(右)

コラム3



ジュニア特派員 宮川千鶴 聖火リレーについて

聖火リレーとはオリンピックの象徴である火を、開催地までつなぐリレーのことです。ギリシャのオリンピア遺跡から、太陽光線を利用して採火されます。東京2020聖火リレーのルートは、まだ正確に決まっていますが、日本全国、47都道府県を周ります。多くは、2日間で一県をリレーしますが、特に地震や豪雨にあった被災県など

では、時間をかけてゆっくり周る予定で、不公平がないように考えられているそうです。

聖火が遠く離れたギリシャから、東京まで運ばれてくるのは、ワクワクしますね！ 様々な思いを込めたオリンピックの聖火リレーは、きっと一生の思い出になることでしょう！

ポッチャ東京カップ 予選 (一般部門)

11月18日(日) 武蔵野総合体育館

ジュニア特派員として活動をはじめて5か月。取材の経験も重ね、はじめての相手にも堂々とインタビューできるようになりました。大会後に行なったポッチャの試合体験では、その難しさと楽しさを実感したようです。

実際のコートでポッチャを体験するジュニア特派員



叫んだり怒ったりすることがないように見えました。ぼくは初めてポッチャの大会を見ましたが、小さな子供でもできる楽しくて分かりやすい競技なので、みんなにオススメしたいスポーツだと思いました。

(取材・文) 宮川竜登

笑って楽しいポッチャの大会

11月18日に武蔵野総合体育館で行われた「ポッチャ東京カップ予選大会」の様子を報告します。ぼくが見たのは3対3の団体戦です。だまってボールを投げている選手もいましたが、話しながら楽しそうにプレーする選手が多くいました。初めて対戦するチーム同士でも、おたがい話しかけたり楽しそうな様子が心に残りました。またポッチャの試合では、サッカーの試合のようにコーチが



会場の様子

選手を思う気持ち 村上コーチインタビュー

リオ・デ・ジャネイロパラリンピックでポッチャ日本代表のヘッドコーチを務めた村上光輝コーチにお話を伺いました。

ポッチャを選手に教えるにあたって気を付けていることをお聞きすると「あまり教えないこと。少しヒントを与えて本人が気づくことが大事だから」と言っていました。リオ大会で団体銀メダルをとった時の心境は「大会初のメダルで日本選手団に勇気を与えられて嬉しかった」そうです。東京パラリンピックの意気込みをきくと、「金メダル!」と仰りたいのですが、個人・団体両方で、選手全員がメダルを取ることが目標です」という言葉が印象的でした。

村上コーチへのインタビューを通して、コーチの選手を思う気持ちがとても伝わってきました。ポッチャを広める活動もされている村上コーチの今後のご活躍に期待したいです。

(取材・文) 宮川千鶴

選手全員がメダルをとることが目標です。



村上光輝コーチ

ポッチャ東京カップ 予選 優勝者インタビュー

優勝した『チーム武蔵野』に話を聞いてみました。ポッチャをはじめたきっかけは「9月のポッチャ武蔵野カップで友人にさそわれたから」だそうです。今日の大会までどんな練習をしてきたのかと聞くと、「YouTubeの動画を見たり、大会当日の朝にみっちり練習をした」そうです。この『チーム武蔵野』はいつ結成したのか聞くと、「この大会のために結成した」そうです。このチームの強みや特徴は、「仲がよくチームワークも良いところ」だそうです。手強かったチームとしては、「全チーム強かった。その中でも西東京ビクトリーが強かった」そうです。『チーム武蔵野』を今後も応援していきたいです。

(取材・文) 高津佑介



ポッチャ東京カップ本選 (3月9日 武蔵野総合体育館) に出場が決まり
本大会での活躍が期待されるチーム武蔵野のみなさん

コラム4

ジュニア特派員 道川結月



オリンピック・パラリンピックのシンボルマーク

2020年まであと1年半です。オリンピックといえば五輪マークですが、どのような意味があるのか調べてみました。五輪マークの正式名称は「オリンピックシンボル」です。五色の輪を重ね、連結した形で、色は左から青・黄・黒・緑・赤の順番です。それぞれの色は、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、アジア、オセアニアの世界大陸を表しているといわれ、5つの輪のつながりには、全世界の人々がスポーツを通じて手をつなぎ、平和な世界を作ろう、という願いがこめられています。また5つの自然現象を意味する、水の青・砂の黄・土の黒・木の緑・火の赤、スポーツの5大鉄則を意味する、情熱、水分、体力、技術、栄養を表しているともいわれています。青・黄・黒・緑・赤に白を足すと、ほとんどの国の国旗が描けるそうです。

もうひとつは、パラリンピックです。パラリンピックのシンボルは、人間の一番大切な三つの構成要素である「心(スピリット)、肉体(ボディ)、たましい(マインド)」を赤・青・緑で表しています。3つの線は「スリー・アギトス」とよばれていて、ラテン語で「私は動く」という、力強くすてきな意味があります。

シンプルな形の中に深い意味がこめられていることを知り、オリンピックとパラリンピックのシンボルマークの大切さがよく分かりました。

2020年のオリンピック・パラリンピックが楽しみです。



コラム5

とくはいん たかねざわまさき
ジュニア特派員 高根澤真輝



長いオリンピックサッカーの歴史

あと1年半で東京オリンピック・パラリンピックを迎えます。今回は、オリンピック競技の中から、サッカーの歴史について紹介します。

まず、サッカーは第一回大会から行われ始めました。1908年のロンドンオリンピック（第四回大会）で正式競技になりました。西側の国ではアマチュアしか出場できず、反対の東側の国はほぼA代表に等しいチームで出場しているため、1952年から1980年まで東の国が金メダルを独占しました。1992年のバルセロナオリンピックから23歳以下の選手のみでの大会になり、1996年のアトランタ大会から、本大会のみ24歳以上の選手を3人まで入れられるようになりました。

コラム6

とくはいん はしぐちわか な
ジュニア特派員 橋口若奈



オリンピックマスコットについて

みなさん、東京2020マスコットのことを知っていますか？
東京2020マスコットは、日本全国の小学生の投票により、谷口亮さんが考案した「ミライトワ」と「ソメイティ」に決まりました。

とうきよう
東京2020マスコットの
カウントダウンボード



オリンピックマスコットのミライトワは正義感が強く、運動神経がバツグンです。特技はどんな所にも瞬間移動できることです。また、伝統を重んじる古風な面と最先端の情報に精通する鋭い面をあわせ持っています。

パラリンピックマスコットのソメイティは桜の触角と超能力を持つクールなキャラクター。顔の両サイドにある桜の触角でテレパシーを受信しています。また、市松様様のマントで空を飛ぶことができます。ふだんは物静かですが、いざとなると誰よりもパワフルです。

この2つのマスコットが、1年半後の東京2020オリンピック・パラリンピックを盛り上げてくれるといいなと思っています。

ジュニア特派員の活動では、武蔵野市コミュニティ研究連絡会より、野本敬忠さん、内藤尚子さんの2名に「サポーター」として参加いただき、取材や打ち合わせにご協力いただきました。第1号では、内藤さんに編集後記をお寄せいただきました。

編集後記

秋季、市役所111会議室。7月から活動中の「ジュニア特派員」12人の第三回ミーティングである。取材のための講座（写真の撮り方）、役割分担のあと、いよいよ新聞タイトル決めとなった。少しずつチームが機能してきたおかげでいろいろな意見が飛び交った。「…新聞」か「…通信」か、最終的には多数決となるのか？両者一歩も譲らず2択も同数となり、サポーターとしてはどうなることやらと見守るしかない。しかし、お互いの思いを否定しているわけではなく、さすが編集長のリードにもより「相手の立場に立って良かれと思う結果」を出していった。思わず拍手を送った。会議、取材と生き生きとした子どもたちと一緒に感動できたことが東京2020大会への興味を広げた。

(ジュニア特派員サポーター：内藤尚子)

【発行】 東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会等に向けた武蔵野市実行委員会
(事務局) 武蔵野市総合政策部企画調整課 (オリンピック・パラリンピック担当)

〒180-8777 武蔵野市緑町2-2-28 TEL:0422-60-1970 (直通) FAX:0422-51-5638